

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	金子 亜由美
論文題目	明治期泉鏡花作品研究—「父」と「女」の問題を中心に—
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、泉鏡花の豊饒な業績から明治期の主要な諸作品を中心に、その作品の構造、それを支える論理性、人物表象の特色など、さまざまな側面からその文学世界を跡づけたものである。時期的には、初期の『海城發電』『貧民倶楽部』から、『湯島詣』『風流線』『婦系図』『白鷺』などを経て、論ずるのが難しい『草迷宮』まで視野に入れ、鏡花の世界を明らかにしている。「父」と「女」の問題を中心に—という副題には、物語形式の次元では「言文一致」の問題を、物語内容の次元では「父」の問題を考えたいという意向が示されている。従来は、鏡花と言えば「母」をめぐる主題を考えることが多いが、本論文は「父」のイメージを重視し、「父」との関係において描かれる「女」「母」について考察することで、新しい視点を提出する。その作中の現われにおいて、鏡花の文体の変遷が問題になるわけである。</p> <p>以上の基本視点を論じた「序章 鏡花世界における「父」の審級」に続いて、本論全体は三部からなる。</p> <p>「第一部 鏡花の出発—「観念小説」を中心に—」は、三章からなる。「第一章 「人外」の「信仰」—「海城發電」論—」は、主人公神崎愛三郎の人間性を論じ、彼の抱く博愛という信念を位置付けつつ、戦争を背景とするナショナリズムとの関係を分析する。「第二章 「悪魔」の挑戦—「貧民倶楽部」論—」は、当時の貧民窟ルポルタージュの影響のもとに成立した作品『貧民倶楽部』をめぐる、その「貧民」の闘争が法とどう抵触するかを軸に、その作品世界を分析する。当時の文学状況を踏まえて、ていねいな分析がなされた一章であろう。「第三章 「父」の構築—「黒猫」から「なもと桜」へ—」は、文語文的な論理性から言文一致の試みを進める過程で、どういった困難が生じたかを明らかにする。鏡花作品の中で余り論じられることのない作品だが、その文体の変化が「父」の構築とどう関わるかを論じて、興味深い。</p> <p>「第二部 鏡花の構想—「詩想」としての「女」—」は、四章からなる。「第四章 「詩想」としての「女」—「笈摺草紙」における言文一致の戦略—」は、言文一致作品である『笈摺草紙』を分析したもので、戦う「男」が後退し、「女」が物語内容の主題としてあらわになる実態を、境界において言文一致と「詩想」の止揚できないドラマとして考える。次の「第五章 もたらされた危機—『湯島詣』論—」で論じられているのは、名作とされる『湯島詣』で、言文一致の論理の中に「母」「女」をどう位置付けるかという問題をはらむ作品であるとする。「第六章 『風流線』のプラクシス」と「第七章 「革命的精神の詩人」村岡不二太—明治期のハイネ受容と『風流線』との関わり—」は、問題作『風流線』を考察した章で、まず師尾崎紅葉の死が鏡花に与えた影響を考察し、主人公の村岡不二太の中に悪魔主義的な性格が形成されていると指摘、その形成に当時の登張竹風や田岡嶺雲のハイネ紹介の文章が影響を与えた形跡があると指摘する。作品形成の背景を丹念に辿る方法を身に付けたこの部分は、論者の研究者としての広がり示しており、注目に値する。</p> <p>「第三部 鏡花の闘い—不遇と再起の時代—」は、四章からなる。「第八章 恩寵としての「音調」—『婦系図』本文異同と「談話」の考察を中心に—」と「第九章 妙子という「婦」—『婦系図』を司るもの—」は、代表作『婦系図』を扱う。基本作業として、本文の異同(初出と単行本)とを調査、当時の各種「談話」の分析を援用し、鏡花の自然派への態度を作品世界に即して跡づける。この作品の構成上の破綻の理由を考察、人物関係の不統一がその理由と考える。その中で、作中の妙子という存在が興味深く、彼女が「父」の力学に対抗する位置にあることを論じた。明確な問題設定のもとに構想された章であると言える。「第一〇章 白い媒介者—『白鷺』における師-父と「女」の機能—」は、師-父との関係性の中で、作中の小篠という女性がどう働きをするのかを分析する。日露戦後の中で、鏡花の模索がどう展開しているかの注意した一章であろう。本論文での論者の持ち味がよく出たのは、最後に置かれた「第一章 『草迷宮』における「感情」の形象化—「声」と「まなざし」の効果を中心に—」に違いない。『草迷宮』は、鏡花研究において要になる作品だが、</p>	

氏名 金子 亜由美

論者は「声」と「まなざし」という補助線を引くことで、従来の研究を乗り越えようとする。浪漫主義の代表作として、その超自然の世界が論じられる作品だが、その根底には鏡花の「声」と「まなざし」に対する独特の感性があるとする。それらが作品の中で「怪異」としてどう形象化されているかを分析する手つきは、鏡花研究者として新たな地平を開いたものであろう。

「終章」では、今後の研究の方向性について問題提起をしている。

以上、本論文の概略を述べたが時には、本文の異同をていねいに調査、時には思いきったイメージ分析を試みるなど、論調が鮮やかで、柔軟であることも特筆すべきであろう。各章の標題の付け方にも、工夫が見られる。作品世界に真摯に向き合い、先行研究を踏まえつつ、新鮮な意味付けを試みた成果は、いくつもの査読論文に結実しており、学会でも評価され、注目されている。研究史の歴史が長く、達成が多く積み重なっており、新たな視点を出すのが難しい鏡花研究の中で、「父」の観点を全面に押し出したこと、それを言文一致など表現の面からも跡づけていることなど達成も多い。ただし、おしむらくは、扱われている作品にもう少し広がりがあったと思われる点である。初期では「夜行巡査」「外科室」、中期では「高野聖」などど跡づけるかも論じてもらいたかった。「海城発電」を論じる時に、他の戦争関係の作品、たとえば「琵琶伝」にも触れてもよかったのではないか。また、「父」という概念はさまざまな意味合いで理解されるはずであり、その概念規定においても、もう少し工夫がほしいこともある。ハイン受容も、柳田國男などとの関連で研究計画もあるというが、大正以降の鏡花作品を論じる課題と共に、今後深めていってもらいたいと思われる。ともあれ、本論文は、明治期の鏡花作品を新たな視点で再構築しようとした試みとして十分な達成となっている。よって、審査委員会は本論文が、「博士(文学)」の学位にふさわしいものであることを認定する。

公開審査会開催日	2016年1月29日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	中島国彦	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋敏夫	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授	宗像和重	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田裕一	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽耕史	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	同志社大学・教授	田中励儀	日本近代文学	